

## 『大坂物語』再考

——「大坂の陣関係軍記」考序論として——

瀬戸 祐規

はじめに

『大坂物語』は慶長十九年（一六一四）の大坂冬の陣、翌元和元年（一六一五）の大坂夏の陣を描いた作品である。大坂の陣を描くものには、この『大坂物語』を始めとして、『豊内記』『難波戦記』等の合戦全体の顛末を叙述した作品（編纂物）、『山口休庵咄』『北川覚書』等の合戦に参加・体験・見聞した者からの聞書・覚書の類、合戦に参加した諸家の記録等がある。<sup>1</sup>これらは様々な叙述形態や立場を有し、成立時期もその幅が広く、一括りに捉えることは難しいが、これらの作品の存在は、いかにこの合戦が重要なものとして捉えられていたのか、人々の関心の対象となるものであったかを物語っている。

本稿で叙述対象とする『大坂物語』は、これら一連の作品群

の中でも初期に成立したものである。合戦直後に古活字本で刊行され、以降整版本として江戸時代を通して何度も刊行されてきた版本『大坂物語』と版本の影響を受けつつ寛文頃には成立していたとされる同名異書の写本『大坂物語』とがあり、従来、その成立と刊行の早さ、仮名草子の嚆矢といった観点から版本『大坂物語』が注目され、本作品の仮名草子としての位置付けや、成立・出版と作者との関係等について論じられてきた。<sup>2</sup>

このうち本作が仮名草子として位置付けられることの是非については、仮名草子に関する考察が諸氏によって行われている<sup>3</sup>が、定義や概念が広範で漠然としており、本作の前後に成立する作品との相違や本作のみが仮名草子に位置付けられる必然性が定かでないこと等から、菊池真一氏が「仮名草子」再考<sup>4</sup>の中で「仮名草子」の中の「戦記」「軍記」ではなく、中世文

芸の「軍記物」の系列としての「戦記物」「軍記物」という分類を考えた方がよいのではなからうか」と指摘したように、先ずは純粹にこれまでの軍記物語の系譜の中に位置付けてその特質等について考察していくことが有効であろうと思われる。

軍記物語の系譜の中での位置付けとしては、笹川祥生氏の提唱する分類<sup>5)</sup>に従えば、戦国軍記と近世軍記(軍書)のはざま、すなわち「戦中の文学(永祿から慶長まで)」と「戦後の文学(元和から寛文まで)」の間に位置する。現在このような分類がなされてはいるが、個々の分類項目の特色と他の項目との相違を明らかにしていく必要がある。柳沢昌紀氏が「出版を前提とする戦記——『大坂物語』の場合——」<sup>6)</sup>において「上下巻が、それぞれ冬の陣、夏の陣の直後に執筆刊行されたという意味では戦中の文学だが、本書は「合戦に明け暮れる人々の姿」を綴る同時代の諸書が戦後の文学に移り変わろうとしている時期に記されたものであった」と述べるように、本作の特色や後続の関係軍記の特色との相違を考察していくことが、この課題を明らかにする糸口となり得るのではないだろうか。

また、本書の叙述対象となる大坂の陣は、関ヶ原合戦と同様に、諸大名を巻き込んだ天下を二分する合戦であり、勝者である徳川の世が確立する上で重要な契機となった合戦であり、幕

府はもちろん徳川政権下の諸大名や各藩に仕える者にとつて、自己や自家の存立基盤ともなるものであった。そのような合戦を叙述対象としたものが、どのように描かれるかが合戦に関わった者にとつて大きな意味を持ったであろうことは想像に難くない。その上、本書が合戦直後に刊行され、長きにわたり版を重ねて刊行されたものであることから、この合戦に対する人々の認識に与えた影響の大きさは相当なものであつたろう。本書を始めとして関係軍記の叙述や特色を検討することで、合戦直後の認識が時の経過とともにどのように変化していくのか、その変化に幕府や社会がどのように関係しているのかを窺い知ることが出来るのではないかと思われる。

本稿では、これらのことを念頭に置きつつ、大坂の陣関係軍記の検討を行っていくに際し、他の作品に先行して成立・刊行され、『豊内記』とともに関係軍記の中心に位置付けられる『大坂物語』を取り上げ、先行研究に基づきながら改めてその叙述について若干の検討を加えていきたい。なお、考察に際しては主として版本『大坂物語』を対象とし、また写本『大坂物語』の成立に関係する冬の陣を描いた上巻部分を中心に、写本の叙述との比較も適宜交え、本書成立当初の姿に注目しながら行っていくこととする。<sup>7)</sup>

## 一 叙述の立場・作者圏

『大坂物語』の成立・諸本展開については、川瀬一馬氏や中村幸彦氏の一連の研究に始まるが、中村氏は本書刊行時の出版事情を鑑み、「この『大坂物語』の出版は徳川方の庇護なくしては、とても動けなかったのではあるまいか」とし、その上で、

この本の表面は、東西の諸侯勇将の話には、各々の勇敢、怯懦をまじえて、第三者的立場で、この合戦を見ているととれるが、一度、角度を改めて、詳しく読めば、天下の権は、この合戦の結末をもって、完全に徳川氏に帰したとの、宣伝以外の何ものでもない。これを出すについては、徳川方、例えば家康の側近などの積極的な動きがあつたものと想像する。

と、徳川方による政治的・宣伝的意図のもとに成立・刊行されたものであつたとし、上巻末に名が挙げられ称賛されている幕僚本多佐渡守正信が関与しているのではないかと推測する。<sup>9)</sup>

これに対して、笹川祥生氏は、中村氏が述べた「ジャーナリズム性を示した書物」とする説を首肯しつつも、

家康を絶賛し、作者が関東を意識していたことは間違いない。しかし、両軍将士の言動は是々非々の立場で記され、

ことさら徳川勢の軍功を称える意図があつたとも思えない。作者としては、いずれに荷担する気持もない、第三者的人物を考えるべきである。<sup>10)</sup>

また、本書を仮名草子の中に位置付ける渡辺守邦氏は、事変の報道を志しつつ、舞の本あるいは軍記物の諸作に基づく潤色を、戦闘場面その他の要所に配することによって、読み物に仕立て上げた

と出版と文章表現に注目し、他の仮名草子にみられる発想や文体との類似性から「素人の作者」による作であるとする。<sup>11)</sup>

これらの諸論を踏まえ再検討を行ったのが加美宏氏であり、加美氏は本書の叙述内容を詳細に検討し、その立場について、一方的に徳川方の立場・視点から書かれたものとは判定できにくく、かなり公平に、第三者的な立場や視点から書かれているといえそうである

と、この第三者的な立場の人を、勝利者・体制側を意識した筆づかいと、一般大衆むけの書き方とを巧みに使いわけ、柔軟にして自在な読物作りのできる人

と想定し、具体的には家康や秀忠の御伽衆・御咄衆などが考えられるのではないかとしている。<sup>12)</sup>

このような考察が行われてきたが、ここでは先学の研究に依りつつ、叙述の立場と作者圏について、まず確認しておきたい。

上巻の冒頭において作者は、

静かなる世は文をもつてし、乱れたる国を武を以すと、

太公望が教へ、目のあたりに思ひあはする事多かりき

と為政者に文武両道の必要性が求められた出来事の一つとして大坂の陣を位置付けている。そして、この合戦の前提となった関ヶ原合戦の顛末について述べ、関ヶ原合戦での勝利によつて大御所様（家康）の治世となり、

無道を罰し、有功を賞録し、神社を修造し、万民を撫で、政道をけつしかりしかば、九州四海関東に帰服し奉り、諸国の渴仰、たとへば北辰の其所にいて、衆星のこれに拱するがごとし

と正しき政道が行われたことにより諸大名が家康に付き従い、太平の世となったことを記す。作者は、この徳川の治世を「堯舜の御代、延喜天曆の聖代も、是には過ぎじ」と称賛している。また、大御所と將軍（秀忠）が勝山、岡山にそれぞれ陣を進め、諸軍勢が大坂城に迫つた際には、

天神地祇も御納受有けるにや、（中略）諸軍勢のにぎはひ、いよ／＼関東の御威光とぞ見えし

と徳川の威光を称え、末尾では、

慶長年中に干戈起る事、すでに二度なり。しかれども、関東御武勇によつて、ある時は、一戦の下に大敵を滅ぼし、たちまち天下を保ち、ある時は籌を帷幄の内にめぐらし、暫時の間に城郭を破り、すなはち国を治め給ふ、文武二道の名将、上古にも例なし、末代にも有り難し

と関ヶ原合戦、大坂冬の陣の両合戦に武勇と智謀をもつて勝利し天下の権を確立した徳川の文武を称揚し、

新たまの年立ちかへれば、名におふ難波の梅も、今を盛りと花咲きて、匂ひは四面にあまねく、君が世のために植へし住吉の松も、今年よりもなを万歳を呼ばふ声、いよ／＼天下太平、国土安穩、めでたき事にぞなりにける

と、徳川の治世となったことを言祝いだ所で上巻を擱筆する。これらの表現の多くは舞の本や軍記物、謡曲の一節、故事や常套表現などから成るが、巻頭・巻末表現の内容とそのあり方から、上巻の作者によつて一定の意図のもとに構成されたものと思われ、そこには徳川の治世を称賛する徳川方視点が窺えるのである。ただし、この視点は中村氏が指摘するような出版に際しての徳川方の庇護や、叙述対象となる合戦直後の刊行であることから、刊行された当時の社会である徳川治世に対する配

慮などが反映されたものであることも考慮すべきであろう。

このような姿勢は下巻末尾においてもみられ、

今度大坂表にての、忠不忠を聞こし召し明め、忠有輩には、望に優る金銀、領地を下され、不忠不義の輩、根を切、枝を枯らして刑戮に行はれしかば、忠臣は進み、佞者は退きて、いよ／＼四つの海八州の外も波静かなる代なれば、かゝるめでたき天下の守護は、上古にも未だなし、末代ともありがたい。たゞこの君の御壽命、万歳／＼万々歳と祝したてまつる。

と合戦後の賞罰を嚴重に行い、天下に静謐をもたらした徳川の威光を称え、徳川の世の永続と家康の長寿を祝福する。平穩な世となったこととそれをもたらした勝者、為政者を称賛することとで物語を終えることは、後期軍記の物語の擱筆の常套的なものであるとも言える。

合戦を描く場面では、先行研究において指摘されているように、是々非々の立場にあると考えられるが、阿部氏や加美氏によってなされている個々の記述の元となった史料の特定と本書との比較<sup>13)</sup>に進めていく必要がある。これについては、加美氏の簡潔で要を得た指摘があるので挙げておく。<sup>14)</sup>

『大坂物語』上巻における関東・大坂両軍の戦いの具体的

な描写や評言などを検討してみると、徳川方も豊臣方も、あまりわけへだてなくとりあげられ、それぞれに盛んな戦意・武勇・智略などが賞揚され、感嘆される一方、無節操・無思慮・卑怯な振舞いなどは、両者ともに批判や嘲笑をうけていることが知られよう。つまり、一方的に徳川方の立場・視点から書かれたものとは判定できにくく、かなり公平に、第三者的な立場や視点から書かれているといえそうである。

なお、合戦描写ではないが注目すべき記述がある。中村氏が成立に関与したのではないかと推測した、本多佐渡守正信についての記述である。

こゝに、本多佐渡守といふ人、七十にして矩を踰えず、智略の深き事、陶朱公も恥ぢぬべし。君と云臣といひ、漢家にも本朝にも、たぐひなき事どもなり。

この記述は先に引用した上巻末の徳川の文武を称揚した記述と徳川の治世を言祝いだ記述の間に位置する。加美氏が「君である家康・秀忠と並べて、ほとんど唐突ともみえる称賛をうけている」とする<sup>15)</sup>ように、正信についての記述は「こゝだけであり、合戦における働きは全く記されていないため、秀忠の執政としての位置にあった人物とはいえ、この場で称賛される必然性が

認められず、やはり唐突としか言いようがないのである。

また下巻では、正信の末子である本多大隅守忠純に対し、

本多大隅守は、大樹の老臣佐渡守の末子にてありけるが、  
つねに武勇を好まれける間、あひ集まる者みな甲斐ぐし  
き者ども多かりけり。その故に度々大坂勢追ひまくり、首  
数多く打つ取りければ、両御所もことに感じ仰せられ、諸  
大名もほめければ、うらやまぬ者こそなかりけれ。

という評がなされている。下巻は徳川方・豊臣方両軍諸將の活躍や最期が人物ごとに羅列する形で述べられており、その一つにこの忠純評があるが、他の諸將の記述とは異なり具体的な活躍が記されていないのみならず、「両御所もことに感じ仰せられ」と家康・秀忠の御感にまで言及することでその武勇が高く称賛されており、他の諸將の評価とは一線を画している。正信とその子忠純に対し、唐突で過度とも言える評価がされているが、このような叙述の背景には作者の構想や立場といったものが少なからずあると思われる、やはり正信周辺の者による何かしらの関わりがあるものと考えべきではないだろうか。さらに、この人物評以外の箇所においても、正信周辺の者の関与を想起させる記述がある。それは写本にはみられず、版本『大坂物語』にのみみられるものである。この点については、他の上巻にお

ける版本と写本の相違とともに次項で述べることとする。

## 二 写本との相違点

版本は上下巻とも合戦直後に成立し、古活字本・整版本の形で広く流布したのに対し、写本は、現存では天理図書館所蔵の上下二巻の一本のみが確認されている。写本については、中村氏、青木晃氏による資料紹介・解説があり、その成立には、上巻においては版本の影響が認められ、寛永（一六二四～一六四四）か、寛文（一六六一～一六七三）を下らない時期の成立ではないかと考えられている。また、作者については豊臣・頼貞の叙述で仏教的詠嘆や御伽草子的な形容が窺えること、夏の陣緒戦で討死した塙（半野）団右衛門の最期についての叙述の饒舌ぶりなどから、かつて禅林にあつて鉄牛と称した団右衛門の知人の僧であつたかもしれないとされている。<sup>15</sup>

既に青木氏によつて、上巻部分の版本と写本の挿話構成についての対校表が示されているが、ここでは両者に記事が存するものの叙述内容が異なる箇所を取りあげ、それぞれの描かれ方に注目することで、叙述の立場などを確認しておきたい。

まずは、豊臣方の将薄田隼人佑兼相が守る伯耆が淵砦を徳川

方の石川主殿助忠総らが攻め寄せたことについて取りあげる。<sup>18)</sup>

版本では、まず明け方に石川勢二千余騎が伯楽が淵に押し寄せ、これに対し砦の薄田勢が弓鉄砲を打ち掛け、鎗・長刀で応戦したものの、忠総の決死の覚悟の猛攻により、薄田勢が船場へ逃げ込んだことが記される。これに続いて、

折ふし薄田は大坂にありけるが、此よしを聞き、船場表へ駆け出る。石川なを薄田を討たんとて、おめいて懸かれば、薄田叶はじとや思ひけん、船場へ逃げ籠り、毛利豊前守に使者を立、「後詰めをなされ候へ。一合戦つかまつらん」といふ。豊前守の返事には、「先をせよならば、参り候べし。後詰めならば、仕るまじき」といはれける。薄田すべきやうはなし。郎等どもを討たせながら、すごくと大坂へ引き退ぞく。いかなる者かしたりけん、一首の狂歌を立けり。

伯楽が淵にも身をば投げよかしすすきたなくも逃げて来んより

「いらぬ所に人数を出し、うち殺され、味方の弱りをしたり」と口ぐに申せば、隼人佑、面目なふぞ見えにける。と砦の守将であるにも関わらず攻められた際に不在であったこと、船場表での対応の悪さ、後詰めを断られたために退却し、

むざむざと味方を討死させてしまった兼相を、狂歌と人口を介して痛烈に非難している。これに対し写本は、

城の内よりは薄田隼人高□と名乗てかけ合、さんぐにた、かいける。御本城にては秀頼の御見物なり。諸勢の者は、川越なればよすべき様もなし。いづれも見物しければ、はれならずという事なし。されども、石川主殿兼て期たる事なれば、命を捨て我さきにとす、みしかば、薄田かなわじとやおもひけん、大手をさして引けるを、こ、かしこにておつつめ三十余人切ふせ、大勢に手をおふせ、我陣さして引にける。むかし田村・としひと・つな・きんときがふるまいも、是にはいかでまさるべしとぞ申ける。其後、何ものやらん、大手のもんに二首のけうかを書付けり。人ごとに命はたれもおしけれど

す、きたなくもにげにけるかな

石川にあたればきる、糸ぐそく

高さねもはややうにた、ばや

と伯楽が淵での合戦であるとは記されていないが、秀頼が大坂城より見守る晴れ場で、兼相が懸命に応戦したとする。ここでも兼相の引き退きに対し、落首を通して非難がされているが、兼相が合戦の場になかったとはせず、常套的な表現ではある



が、「坂上田村麻呂・利仁將軍・渡辺綱・坂田公時」を引き合いに出し、その武勇を記す落首を付加することで忠総の活躍をより強調し、版本が痛烈に行つた兼相に対する非難を相対的に和らげていると思われる。写本のこの叙述は、版本と比較すると兼相擁護の豊臣方の立場を取っているといえようか。

次に、最も大きな相違をみせる記事として、大坂城惣構の東南端に築かれた真田丸と称される砦における豊臣方の真田左衛門佐信繁勢と徳川方の松平（前田）筑前守利常・井伊掃部助直孝・越前少将（松平忠直）勢との攻防を描く箇所を取りあげる。

版本ではまず、徳川勢の真田丸への進撃に先立ち、信繁が策を弄して真田丸の前にある篠山という藪に徳川勢をおびき寄せたことが記される。松平筑前守の先手である本多安房守政重が篠山に押し寄せ閨を上げたが、反応がなく、真田勢は既に出丸に引き退いていたため引き上げようとしたところ、信繁が出丸の矢切の上から、「かたゞは篠山に勢子を入れ、雉狩をし給ふか。日比は雉もありつれ共、此程の鉄砲にゆかを替へて候。御つれなにも候はゞ、此城へ懸からせ給へ。いくさして遊ばん」と挑発する。これに対し、政重が「もつともの存〔所脱カ〕にて候」と心えて采を振り真つ先に攻めかかったとある。この叙述について加美氏は、「肩すかしをくわせて敵を翻弄し、口舌をふるつて相

手を圧倒して、「いくさして遊んでいる真田の面目が躍如としており、作者は、豊臣方に肩入れしているかとさえ思わせるものがある」とする。<sup>19</sup>真田丸をめぐる攻防における信繁の活躍はこのみであり、また、下巻の諸將の戦功部分においても、「関ヶ原の一乱以後、高野の住まゐるを仕り、むなしく月日を送る所に、幸に此乱出でて、かたじけなくも故太閤相国の御子、右大臣秀頼公に、一人当千と頼まれ申たる、真田左衛門佐とは我が事也。心あらん若者ども、我が首取つて將軍の御感に預からぬか」と名乗り、鉄砲で射抜かれ馬より落ちた所を越前少将の郎従に討たれたとするのみであることからすれば、真田丸での攻防における作者の主眼は、信繁の活躍を描くこととは別な所にあると考えるべきであろう。

版本はこの信繁と政重の詞戦いに続いて、その夜、越前少将の先手が真田丸に押し寄せたこと、越前勢の「年のほど十四五と見えたる」若武者が、後見の制止を振り払って先駆けをしたこと、松平筑前・越前少将両勢の進撃を受けて井伊勢が出し抜きをすべく押し寄せたこと、松平筑前・越前少将・井伊勢の猛攻にも関わらず事態は進展せず各勢とも退却することになったことが記されており、中でも、信繁と詞戦いをした本多政重と越前勢の先駆けをした若武者の記述が注目される。



政重については、詞戦いの他、筑前勢の引き退きに際して、山崎閑斎という法師武者との間に殿争いがあり、互いに相手に退却を勧めるも一歩も退かず、閑斎が「法師の役に、先に参る」と折れたことで、政重も漸く退いたことが記されており、作者による評言はないが、彼の武勇を表したものであるといえよう。

また、越前勢の若武者については、越前勢の殿をつとめ、城内の真田勢からの「只今後に引かせ給ふは、よしある人躰と見申て候。まさなくも引かせ給ふものかな。返させ給へ」との呼びかけに対し、「返すにかたき事か」と言つて刀を振るつて応じようとしたこと、それを周囲の人々が「鎧の袖にすがり付」いて引き留めたこと、若武者のこの勇敢な行爲を「あつばれ武者。英雄けつ程の勇士とも、かかる人をや申べき」と一同が称賛したことを記す。そして、その若武者を「越前少将の御弟に松平出羽守と申て、生年十五にならせ給ふ。たぐひなき事共なり」と素性を明らかにした上でその武勇を褒め称えている。

版本では、この二人の動向が注目され紙幅が割かれている。このことから、作者の主眼は寄手の徳川方の動向を描くこと、中でも本多政重と松平出羽守直政の武勇を称賛することにあったと考えられる。

これに対し写本は、信繁と政重の詞戦い、本多政重・松平直

政の活躍といった版本が描いてきたものを一切描かず、松平筑前守の呼びかけにより筑前勢と井伊勢が同時に関の声を上げて攻めたこと、真田勢が打つて出たことを記す。信繁については、

真田左衛門吉清其勢武万余騎にて打て出る。卯ノ刻より矢合をして、おつかけのりまはし、かけみだしてぞ戦ける。或は指違組打し、或はいたでうすでおる、馬の上より落るも有。さんぐくにた、かいしは、一日の合戦に真田が手につかけ、くつきやうの兵者百六拾騎打ければ、又よせての方へもさなたがらうどう七十三騎うちにつけり。其日も既に暮ければ、敵も味方も相引にこそ引にけり。

と、策略を廻らし敵を困惑させる智将としての側面は描かれなくなつたが、政重や直政といった徳川方将士の武勇も描かれていないため、敵の猛攻に対し勇敢に打つて出たことが前面に押し出された形となつており、ここでの主眼は真田の武勇を描き称賛することにあつたと考えられる。この真田丸の攻防を描いた記述においても、徳川方の武勇を描く版本に対し、写本は豊臣方に寄つた立場を取つているといえよう。

ここまで徳川方・豊臣方といった立場の相違が認められる箇所を見てきたが、別な観点での相違として、冬の陣の扱いについての記述を取り上げておく。まず版本は次のように記す。

將軍より大御所へ仰せられけるは、「諸軍勢みな堀ぎはま  
で仕寄り候へば、二三日のうちに総攻め申付候べし」と御  
申ありければ、大御所の御誕には、「総攻めの事、まづ〱  
待たせ給ふべし。此城たとひ外側を取りたり共、二三の丸  
を落とし難かるべし。(中略)只我にまかせて、しばし待ち  
給へ」との御誕なれば、將軍力及ばせ給はで、総攻めを延  
べらる。その後、大御所、本多上野介を召され、「城の様、  
さすがに秀頼は若し、御ふくろは女儀なり。家中はみな小  
身の者、又は新參の集まり者なれば、今はや心まち〱に  
なりて、かたき事あらじ。扱を入れて見よ」との御誕なり。

ここでは、將軍秀忠による総攻めの提案に対し、大御所家康  
が信長・秀吉の例を出して大坂城の守りが堅いことなどを理由  
に斥け、本多上野介正純に扱いを命じている。そして、家康の  
意を受けた正純の命により京極若狭守が使者として遣わされた  
ことが記されている。これに対して写本は、諸国の大名小名が  
総攻めを將軍秀忠に訴訟したと記し、

爰に本多佐渡守正信といふもの有。將軍の御前に畏て申  
けるは、「尤わふぜいを以せめ給ば、なかは落ざらん。去  
ながら、とがわを取、二三の城にかゝりしかば、味方の御  
勢多くうたるべし。(中略)御あつかいおもあそばし候へか

し」と申上ば、將軍聞召、「誠に若大将なれば、御あつかい  
をも入ばや」とて、京極若狭守をめされの給ひけるは、「名  
城成と云共、諸勢をはやあつめかけ候へば、もうせいを以  
せめおとさん事何之子細有べからず。然共、一つはもん者、  
又は太閤の一子なれば、彼是以不便候。今日よりたがひの  
ゆみ矢をとめ給はゞ、(中略)」とて、

と、本多正信の信長・秀吉の例を挙げた進言により秀忠が扱い  
を命じ京極若狭守を使者として遣わしたとする。さらに和議の  
成立と大御所・將軍・諸大名の引き退きとを記した後、

誠に此將軍はたゞ人にはあらず。果報目出度して知恵才  
覚さへ世にこへ、大國迄も名を得し城なれ共、さつしの間  
に平城となし、剩諸軍勢の告身<sup>ママ</sup>をやめ、国<sup>土カ</sup>豊かに成事も、  
偏にいみじきはかり事をめぐらし給ふ故也。文武二道の名  
將、上古にも末代にも有難かりし將軍かなと、時の人々か  
んじけり。

と、版本では「関東御武勇によつて」としてやや表現が異なる  
所を、写本は「將軍」とすることで、扱いを命じて平和をもた  
らした秀忠を称賛している。写本に見られるこの秀忠称賛の叙  
述は、徳川方視点や豊臣方視点といったものというよりも、版  
本の内容をもとに述べるにあたって、写本の作者が著述当時の

社会を意識して改変した表現とみるべきであろう。

### おわりに

版本『大坂物語』上巻部分の叙述を中心に、作者の立場や写本との相違点についてみてきた。批評部分の叙述は、豊臣・徳川の両者にみられ、批判においても両陣の武将の言動に対して同様に Rowe されており、一方の側だけが強く非難されているとは認めがたい。取り上げられている箇所が多さでいえば、むしろ徳川方の武将に対する批判の方が多いようにも見受けられる。しかし、真田丸での攻防における叙述のありようなどにおいて、徳川方将士の活躍に焦点が当てられており、やはり徳川方の活躍を描くことに主眼があることは否めない。さらに、本書が合戦直後に出版され、その中に勝者である徳川方の武将に対する批判的な表現がみられることから考えると、この徳川方の将士に対する批判的な表現は、批判というよりも将士たちの活躍・失敗を面白おかしく語ろうとする物語的・咄的側面と捉えるべきであろうか。

また本書では、徳川方将士たちの中でも本多正信とその子正純・政重・忠純が描かれていることが注目される。正純につい

ては、大御所家康の意向を伝え、扱いを下達する役目を担う側近としてその存在が記されているため、些か様相を異にするが、正信・忠純に対しては唐突ともいえる称賛がなされ、政重については合戦における中心人物として活躍とともに武勇が称賛されている。正信は、大坂の陣当時は將軍秀忠の側近として、また、家康から絶大の信頼を得た腹心として、幕府権力の中枢にいた人物であるが、その子息も皆このように記されているということは、やはり本書の成立・出版に本多氏の関与、あるいは影響が少なからず認められるとすべきであろう。さらに言えば、嫡男正純だけがその叙述の様相を異にすることにも何かしらの意図があるのではないかと思われる。正信・正純父子は長きにわたり大久保忠隣らと権力抗争を行っており、慶長十九年（一六一四）正月の忠隣失脚までの間に、抗争に関連した事件が起こっており、同十七年（一六一二）三月に正純家臣の岡本大八が取締により処刑された一件もその一つと考えられている。<sup>20</sup>この事件による正純の権威に対する影響が、本書の正純の叙述と関係することも考えられるが、現段階では推測の域を出ない。今後このような背景も検討していく必要がある。

対して写本は、版本の影響を受けつつ、徳川方武将の活躍・称賛部分を削除し、豊臣方武将の活躍を記すだけでなく、豊臣

方武将对する批判を和らげるといった形で豊臣方寄りの立場をとっていた。一方で、成立当時の社会に対する配慮も窺えた。

以上、先学によりつつその叙述をみてきたが、依拠資料や出版による社会への影響、下巻の叙述等、多くの問題がある。また、本稿では成立当初の姿をとどめる古活字版第一種本文を取り上げたが、第一種から第五種、さらには整版本へと版行に伴いその本文が変容していくことに注目し、本稿においても言及した関ヶ原合戦記事等の様相から、本書の性格について論じられた柳沢昌紀氏の御論<sup>21</sup>も踏まえ、本文の変容による本書の性格と、写本の成立との関係等について明らかにしていく必要があるが、それらは今後の課題とし、別稿において述べることにしたい。

〔注〕

- (1) 『戦国軍記事典 天下統一篇』「大坂の陣」概説(青木晃氏執筆)(古典遺産の会編、和泉書院、二〇一一年)等参照。
- (2) 川瀬一馬氏「大坂物語の研究」(『書誌学』一卷四号、一九三三年七月、のち『増補古活字版の研究』一九六七年に収載)、中村幸彦氏「大坂物語諸本の変異」(『文学』四六巻八号、一九七八年八月、のち『中村幸彦著述集』第五巻、一九

八二年に収載)等。

- (3) 中村幸彦氏「仮名草子の説話性」(『国語国文』二三巻一二号、一九五四年十二月、のち『中村幸彦著述集』第五巻に収載)、前掲注(2) 同氏論文、菊池真一氏「仮名草子」再考(水田潤編『近世文芸史論』桜楓社、一九八九年)等。
- (4) 前掲注(3) 参照。
- (5) 笹川祥生氏『戦国武将のこころ 近江浅井氏と軍書の世界』(吉川弘文館、二〇〇四年) 参照。
- (6) 「軍記と語り物」第四八号(二〇一二年三月)
- (7) 引用本文として、版本は新日本古典文学大系『仮名草子集』(渡辺守邦校注、岩波書店、一九九一年)所収本を、写本は『畿内戦国軍記集』(青木晃等編、和泉書院、一九八九年)所収本を使用。なお、本稿では、版本についてはまず始めに、本書成立当初の姿に注目し、上・下巻ともそれぞれがその初期の形をよりとどめているとされる伝本を底本とする古典文学大系所収の本文を引用本文とした。
- (8) 前掲注(2) 参照。
- (9) 前掲注(2) 参照。
- (10) 笹川祥生氏『大坂物語』解題(『日本古典文学大辞典』第一巻、岩波書店、一九八三年)

(11) 渡辺守邦氏「仮名草子『大坂物語』の文体」(『武蔵野文学』三八号、一九九一年一月)

(12) 加美宏氏「『大坂物語』の作者圈」(長谷川端編『承久記・後期軍記の世界』軍記文学研究叢書一〇、汲古書院、一九九九年)

(13) 前掲注(12) 加美氏論文、阿部一彦氏「『大坂物語』と『豊内記』——「覚書」・「聞書」を媒介にして——」(『淑徳国文』三六号、一九九五年二月、のち同氏『太閤記』とその周辺』和泉書院、一九九七年に収載)

(14) 前掲注(12) 参照。

(15) 前掲注(12) 参照。

(16) 前掲注(2) 中村氏論文、前掲注(7) 青木氏解題参照。

(17) 前掲注(7) 青木氏解題参照。

(18) 前掲注(12) 論文においてもこの合戦について言及されている。

(19) 前掲注(12) 参照。

(20) 『戦国武将合戦事典』(峰岸純夫・片桐昭彦編、吉川弘文館、二〇〇五年)「本多正信」「本多正純」「大久保忠隣」項等参照。

(21) 柳沢昌紀氏「『大坂物語』論——歴史はどのように記述さ

れるのか」(鈴木健二編『形成される教養——十七世紀日本の〈知〉』勉誠出版、二〇一五年) 参照。

附記 本稿は、二〇一六年十二月十一日に行われた第八十八回 関西軍記物語研究会での発表に基づいたものである。席上等においてご教示を賜りました方々に対し、深謝申し上げます。

(せと ゆうき／本学非常勤講師)